

9 血液透析患者のかゆみの実態調査 ～かゆみと経表皮水分蒸散量 (TEWL) との関係～

J A長野厚生連小諸厚生総合病院 臨床工学科 看護部¹⁾技術部²⁾

○大井真由美¹⁾小平めぐみ¹⁾渡辺よし子¹⁾荻原裕房²⁾

I はじめに

透析技術の進歩に伴い、長期透析患者が増える一方、多くの合併症をもつ患者も増加している。その中で、かゆみは患者の QOL を低下させる深刻な合併症となっている。原因として、皮膚の乾燥・尿毒症性物質の蓄積など、様々な要因が考えられている。

そこで今回、かゆみと皮膚の乾燥度の関係を知るために、かゆみの実態調査と経表皮水分蒸散量 (以下 TEWL) の測定を行なったので、その結果を報告する。

II 方法

1. 対象

研究主旨を説明し、同意が得られた意思疎通が可能な外来血液透析患者 86 名

平均年齢 66.4 歳 (±11.4 歳)

平均透析歴 8 年 3 ヶ月 (±6 年 10 ヶ月)

2. 実施期間

平成 22 年 9 月～12 月

3. 研究方法

1) 独自に作成した質問用紙を用い、血液透析施行中に看護師による聴き取り調査法でアンケートを実施した。

かゆみの分類には白取の分類:『掻痒と重症度基準』¹⁾を用いた。

2) TEWL の測定について

(1) 測定器にはアサヒバイオメッド社 AS-VT100 を使用した。

(2) 測定時間は患者の状態及び環境が安定したと思われる透析開始 1 時間後とした。

(3) 測定部位は、バスキュラーアクセス反対側前腕内側とした。

(4) 同一部位を連続 3 回測定し、その中間値で評価した。

(5) 測定時の環境は、環境条件を同一にするため、温度 26℃、湿度 50% で実施した。

4. 倫理的配慮

研究対象者には、研究の主旨、目的、方法について説明し、参加協力は自由意志であり協力の有無により不利益はないこと、また研究対象者のプライバシーは最大限尊重し、得られた情報は研究のみ使用することを文章と口頭で説明し同意を得た。

5. 用語の操作上の定義

1) 経表皮水分蒸散量 (Transepidermal Water Loss): 一定の面積、時間における水分の喪失量を表すもので、値が高いほど角質からの水分喪失量が多く、皮膚の保湿機能が低下していることを示す。

2) 白取の分類:『掻痒と重症度基準』は、かゆみの程度について 5 段階にカテゴリー化した評価。

レベル 0: 症状なし

レベル 1: 軽微なかゆみ

レベル 2: 軽度なかゆみ

レベル 3: 中等度のかゆみ

レベル 4: 激烈なかゆみ

III. 結果

透析を導入してからかゆみの経験はあるかの問いに対し、70%の患者があると答えていた。(図 1)

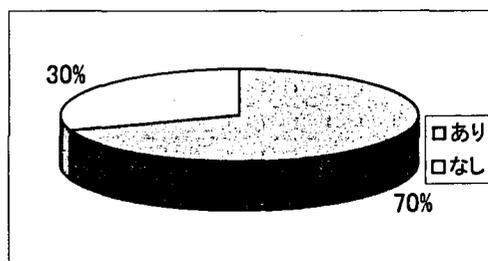


図 1. 過去のかゆみの経験

かゆみに対しては、透析条件の見直し(ダイアライザー、透析時間の変更など)や内服、軟膏処方、皮膚科での継続的な治療または衣類の工夫等、かゆみの軽減を図るように努めてきた結果、現在もかゆみがあると答えた患者は全体の40%になっていた。(図2)

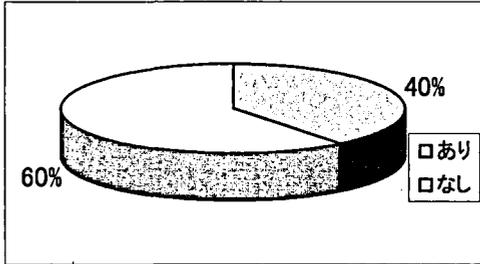


図2. 現在のかゆみの有無

次にかゆみに対しての薬剤使用状況を、かゆみのあり・なしで比較した結果を図3に示す。かゆみありの患者では、内服、軟膏など何らかの薬剤を使用している患者が65%おり、またその両者を併用している患者が21%いた。それに対し、かゆみなしの患者では、両者を併用している患者はおらず、全く薬剤を使用していない患者が71%であった。また薬剤を使用していてもかゆみは改善せず、気休め程度にしかならない、保湿効果のある入浴剤や市販のローションを使用しているとの声も聞かれた。

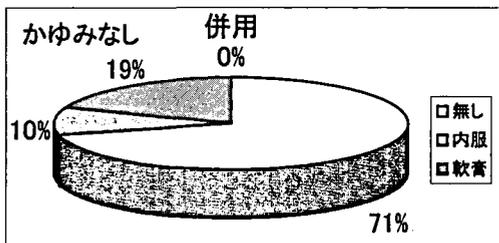
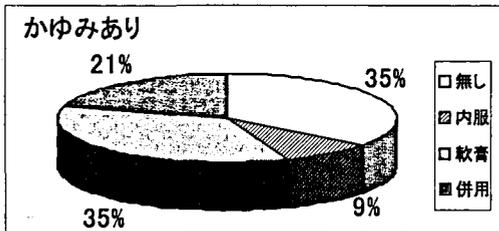


図3. かゆみに対し薬剤の使用状況

かゆみの経験がある患者に白取の分類でかゆみの程度を聴き取り調査した結果を図4に示す。今回の調査では、かゆみの程度を最も強く示すレベル4の患者が昼・夜ともに30%を超えており、レベル3も合わせると、昼68%、夜52%でともに50%を超えていた。

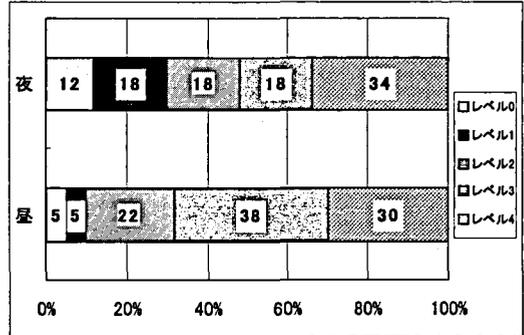


図4. かゆみの程度

かゆみの部位については図5に示すように、背部のかゆみを指摘する患者が41%と最も多く、次いで上肢15%、下肢14%の順であった。

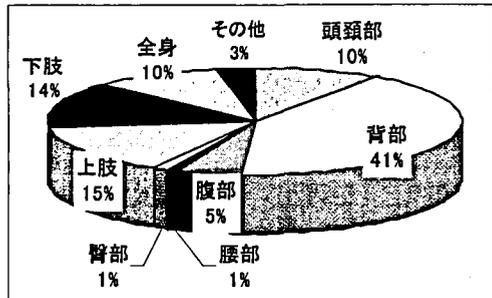


図5. かゆみの部位

季節によるかゆみについては冬が58%と最も多く、秋17%、夏14%、春11%の順となっていた。(図6)

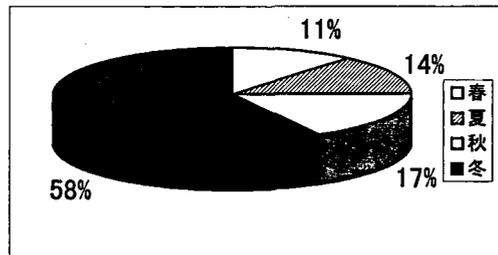
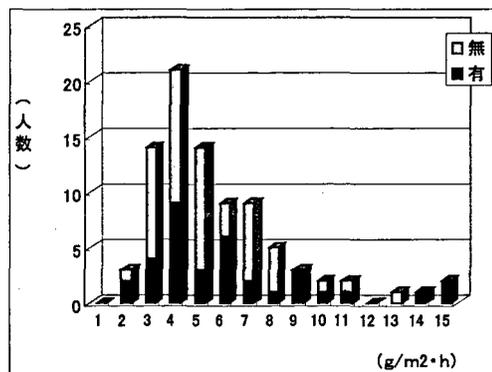


図6. 季節別かゆみの割合

TEWLの測定結果を図7に示す。
 今回の調査では、 $25 \text{ g/m}^2\cdot\text{h}$ 以下の正常範囲に入っていた患者が85名で、強い乾燥度を示す $30 \text{ g/m}^2\cdot\text{h}$ 以上の患者は1名であった。
 なお平均は、 $6.17 \text{ g/m}^2\cdot\text{h}$ であった。

図7.経表皮水分蒸散量とかゆみの有無



その他、患者がどんな時にかゆみが発生しやすいか、また『自宅で何か工夫していることは』の質問に対しては、以下のような意見が聞かれた。

- ・汗をかいた時、お風呂に入った時、空気が乾燥している時などにかゆみが出現しやすい。
- ・乾燥をさせないように、お風呂あがりに保湿クリームを塗布している。
- ・サウナに通い汗をかくとかゆみが軽減する。
- ・夏場の暑い時期はゴザの上で寝る。
- ・かゆみの場所を冷やすとかゆみが緩和する。

IV. 考察

今回の調査から、血液透析患者のかゆみは、私たちが思っていた以上に多く見られ、透析条件の変更や、薬剤使用などで軽減はしているものの、患者を悩ます合併症であることを再確認した。そのため、患者の訴えを傾聴し、状況を把握しながら、個々にあったアセスメントをしていく必要があると思われる。

また、かゆみの部位として背部でのかゆみを指摘する患者が最も多く、その理由として、『背中掻くことができないから辛い』などの意見から、背部は手が届かない場所であり、かゆみを助長させているのではないかと考えた。

TEWLの測定結果ではかゆみの有無が幅広い範囲で出現しており、かゆみとTEWLとの間で明らかな関係をみることはできなかった。しかし、乾燥を自覚している患者もいることから、皮膚の乾燥とかゆみについては、今後さらに季節別、部位別などでも比較し、検討していく必要があると思われる。

V. 結論

1. かゆみの原因、程度、感じ方は患者によってさまざまである。
2. 今回の調査では、TEWLとかゆみとは明らかな関係は見られなかった。
3. 薬剤に頼らず、かゆみを軽減できるような看護ケアを検討していく。

VI. 謝辞

今回の研究にあたりご協力いただきました皆様に深く感謝いたします。

VII. 引用文献

- 1) オキサトミド臨床研究班：皮膚掻痒症に対するオキサトミドの臨床的検討. 西日本皮膚 45: 432-443, 1983
- 2) 高森 建二：痒みのある皮膚疾患 診断と治療 vol.95 No.9 2007
- 3) 平田 純生：透析患者のくすり箱 透析ケア P88 2009年